

例 言

1 本書は、国庫・県費補助事業として鈴鹿市が令和5年度に実施した市内遺跡発掘調査等事業のうち、伊勢国府跡（長者屋敷遺跡第43次）調査の概要をまとめたものである。

2 発掘調査は以下の体制で実施した。

調査主体 鈴鹿市 市長 末松 則子

調査指導 石田 由紀子（独立行政法人国立文化財機構 京都国立博物館 学芸部考古兼企画室 考古室長）

小澤 毅（三重大学 人文学部 教授）

金田 章裕（京都大学 名誉教授）

和田 勝彦（財団法人 文化財虫害研究所 常務理事）

渡辺 寛（皇學館大学 名誉教授）

三重県教育委員会事務局 社会教育・文化財保護課

三重県埋蔵文化財センター 活用支援課

調査担当 鈴鹿市文化 スポーツ部 文化財課

文化財課長 大森 隆仁

副参事兼発掘調査グループリーダー 常山 隆宏

発掘調査グループ 主幹 田部 剛士

勝田 遼五

パートタイム会計年度任用職員 渡辺 愛子

伊藤 和香奈

3 発掘調査を実施した場所及び面積・期間等は以下のとおりである。

鈴鹿市広瀬町字長塚 1259 番（6AFE-C・D・E区）面積 223㎡

調査期間 令和5年12月18日～令和6年3月17日

4 現地調査は勝田が主体となり、測量・図化等の補助を田部、渡辺が行った。また、本書の執筆、遺構・遺物の写真撮影、全体の編集は勝田が担当した。

5 調査参加者は以下のとおりである。

〔現地調査〕 伊藤 和代・加藤 忠昭・木村 芳雄・町野 計司・東屋 輝夫（三重県シルバー人材センター連合会）

〔屋内整理〕 加藤 利恵・永戸 久美子・前出 みさ子（文化財課パートタイム会計年度任用職員）

6 Fig.1では国土地理院2万5千分の1地形図「鈴鹿」「亀山」の一部を、Fig.2では国土地理院20万分の1地勢図「名古屋」の一部を加工して使用した。

7 座標は過去の調査との整合性を保つため、日本測地系第Ⅵ系を用いている。なお、図中の方位は座標北を示す。

8 本調査に係る図面・写真は全て鈴鹿市考古博物館が保管している。

9 調査及び報告書刊行にあたっては上記調査指導の個人・団体の他に、地元各位をはじめ、下記の方々のお世話になりました。記して感謝申し上げます。（順不同・敬称略）

亀山市 生活文化部 文化課 まちなみ文化財グループ・麻生 満・飯島 裕二・広瀬町自治会・鈴鹿市シルバー人材センター

目次

例言	i
目次	ii
I 遺跡の位置とこれまでの調査成果	1
II 調査の経過	2
III 発掘調査	4
1 調査の目的と方法	4
2 調査の成果	4
(1) 基本層序	4
(2) 各調査区の概要	4
(3) 検出遺構	5
(4) 出土遺物	5
IV まとめ	6
伊勢国府跡関連参考文献	7
報告書抄録	
奥付	

表目次

Tab.1 調査履歴	3
Tab.2 報告書抄録	19

図版目次

Fig.1 遺跡の位置と周辺の遺跡	8
Fig.2 伊勢国府跡周辺の主な官衙・寺院関連遺跡	8
Fig.3 調査区位置図	9
Fig.4 6AFE-C・D・E区 遺構配置図	10
Fig.5 土層断面図①	11
Fig.6 土層断面図②	12
Fig.7 北方官衙 長塚南東区周辺で確認された遺構	13

写真図版目次

Plate 1 調査前風景（南東から）/6AFE-C区検出状況（上空から）	14
Plate 2 6AFE-D区検出状況（上空から）/SD388・SD389・SD392 検出状況（南東から）	15
Plate 3 SD390 検出状況（西から）/SD391 検出状況（西から）	16
Plate 4 SD388 東壁土層断面（西から）/SD389 東壁土層断面（西から） SD392 東壁土層断面（西から）/SD390 西壁土層断面（東から） SD390 東壁土層断面（西から）/SD391 西壁土層断面（東から） SD391 南壁土層断面（北から）/SD393 西壁土層断面（東から）	17
Plate 5 サブトレンチ8の瓦出土状況 / 主な出土遺物	18

1 遺跡の位置とこれまでの調査成果

史跡伊勢国府跡(長者屋敷遺跡:以下、遺跡としては「長者屋敷遺跡」)は鈴鹿川の支流である安楽川の左岸に所在する(Fig.1・2)。一帯は標高約50mの台地で、鈴鹿山脈の裾野に広がる水沢扇状地の扇端に位置する。南面に広がる谷底平野との比高差は約20mである。遺跡の北半は鈴鹿市広瀬町に、南半は西宮町に属する。また、遺跡の西側の一部は亀山市能褒野町におよんでいる。

当遺跡一帯は鈴鹿市の農業振興地域であり、水田のほか茶・サツキ苗・芝などの商品価値の高い畑が広がるほか、牛舎・豚舎および製茶施設が点在する。

瓦の出土や基壇・土塁状の高まりが各所にみられることから「矢卸長者」の伝説が伝えられる。遺跡の範囲は南北約1,300m×東西約700mと広いが、瓦など古代の遺物が散布する範囲は南北約800m・東西600mに限られる(村山1992)。

瓦散布範囲の南端中央で平成5(1993)年度に国府政庁(以下「国庁」)が確認され、その後国庁の北方で発見された建物群(北方官衙)を合わせた3地点合計73,940㎡、平成14(2002)年3月19日に伊勢国府跡として史跡に指定され、平成29(2017)年10月13日に北方官衙の一部1,409㎡が追加指定された。長者屋敷遺跡における国府関連の遺構・遺物の時期は8世紀中頃から9世紀初頭と狭い範囲に限られる。

鈴鹿川流域には古くから東西交通の要衝として多くの遺跡が残されている。古代には畿内と東国を結ぶ東海道が通っていたと考えられる。鈴鹿駅は鈴鹿関付近に、河曲駅は伊勢国分寺跡および隣接する河曲郡家(孤塚遺跡)周辺に位置したことは疑いない。古代官道の遺構としては、鈴鹿川右岸の平田遺跡で側溝芯々間が9mの道路痕跡が発見されている(林2005)。この道路遺構は奈良時代後半のものと考えられ(田部2016)、鈴鹿市国府町の伊勢国府推定地と同国分町の伊勢国分寺跡を結ぶ線上に立地する。奈良時代の一時期には亀山市関町古概(鈴鹿駅家推定地)と伊勢国府推定地を結んで鈴鹿川右岸を通る官道が存在したのであろう。奈良時代中期頃になると、鈴鹿関が鈴鹿川の左岸に整備されるに伴い、官道も鈴鹿川左岸に付け替えられたと考えられ、長者屋敷遺跡の国府の整備もそれに伴うと考えられるが、鈴鹿川左岸の官道の実態は未だ不明である。

長者屋敷遺跡で国府政庁が確認されるまでは、鈴鹿川対岸の鈴鹿市国府町が、「国府」という地名とともに、伊勢国総社に比定されている三宅神社や府南寺といった由緒ある社寺が窺えることなどから、伊勢国府の所在地と考えられてきた。伊勢国府推定地の範囲内においても

各所で調査が行われている。三宅神社遺跡第1次調査では奈良時代前期の大型方形井戸が検出された(新田1997)。第2次調査では整然と配置された平安時代の掘立柱建物群が(藤原1997)、第5次調査では墨書土器や斎車などの祭祀具を伴った井戸や大型の掘立柱建物群などが確認されている(林2001)。また、天王山西遺跡では施釉陶器を多く伴った掘立柱建物群が検出されている(杉立2001)。梅田遺跡では平安時代前期の集落と平安時代末期から鎌倉時代にかけての有力者の居宅が調査されている(石田2001)。また、富士遺跡では銅造遺構が検出され(田部2007)、黒色土器が多く出土した(吉田隆2008)。このように、国府地区には奈良時代前期および奈良時代後期から平安時代にかけての遺構・遺物が濃密に分布し、鈴鹿郡家および初期・後期国府が所在した可能性が極めて高いと考えられるが、官庁と決定付けられる遺構は未確認である。

長者屋敷遺跡における学術調査は昭和32(1957)年に遡る。歴史地理学的な国府研究の一環として鈴鹿市国府町で調査を行った京都大学の藤岡謙二郎が鈴鹿川・安楽川を挟んだ対岸の長者屋敷遺跡の存在を知り、調査を行った。当時、国府町に国府城を想定していた藤岡らは、長者屋敷遺跡が初期の国府である可能性を示唆しながらも、鈴鹿関との関連から軍団跡である可能性を強調した(藤岡ほか1957)。

鈴鹿市では平成4(1992)年度から長者屋敷遺跡の学術調査を開始し、平成5(1993)年度の「矢下」地区における国庁の確認によって伊勢国府跡であるとの評価が定着した(藤原ほか1995)。国庁の北方においては「南野南」「長塚南西」「中土居南」の各区画(区画の通称はFig.3参照)において瓦葺礎石建物群(以下「北方官衙」)が発見された(新田1997・1999ほか)。

また、三重県埋蔵文化財センターによる北西域の緊急調査によって北方官衙に伴う方格地割の存在が明らかとなった(宇河1996)。調査を担当した宇河雅之は国府国庁城を含む南北6区画・東西5区画の方格地割を想定し、北端に位置する金殿を平城宮における松林苑に相当すると考えた(宇河1973)。方格地割はその後の調査で北方官衙城において区画施設が徐々にみえられる一方(吉田真2004・水橋2005・小倉2006)で、国庁以南においては「朱雀路」のみならず地割や官衙らしき遺構は全く確認されなかった(吉田真2004・水橋2005)。

平成25(2013)年度の第31次から第34次調査において宇河の方格地割案の北西部及び東部の確認調査を行ったが、いずれも区画溝等は確認されなかった。結局、方格地割で確実なものは南北大路を中心に東西4区画・

南北3区画と考えることが妥当とされた（新田2013・藤原2014・2015）。

北方官衙の北に位置する金蔵は、長者伝説の舞台として知られる。外周部の調査の結果（田部2007・2009）によれば、何らかの基壇を有する建物が存在する可能性が高いと考えられた。また、方格地割の中軸線に相当する位置で発見された幅24mの南北大路が金蔵と国庁を結ぶ中軸線と一致することが確認され、三者の計画的な関連性は確実であるとされた（田部2010）。このように北方官衙は街路による整然とした区画が行われ、調査指導において単なる方格地割というより方格街区と呼ぶことがふさわしいとされた（藤原2019）。

平成27（2015）年度以降は、国庁と方格街区の間での確認調査にも主体が置かれた。南北大路が北方官衙と国庁の間にも延びることが確認された（藤原2018）ほか、北方官衙の南東に、「荒子東」区と呼ぶべき区画が互葺き建物を伴い存在することが判明するなど（藤原2016・2017・2019）の成果が得られたが、政庁の周囲では相変わらず建物等の確認にはいたらず空白域となっている。

令和元（2019）年度までで方格街区の範囲確認は一区切りとなり、令和4（2022）年度以降は若干方針を転換して、北方官衙の追加指定を念頭に未指定になっている長塚南東区を対象として建物配置の把握と遺構の遺存状況の確認に努めている。令和4年度の第42次調査では長塚南東区の北東端から長塚北東区の南東端にかかる範囲を調査し、両区画の間に幅15mの東西街路があったと想定される結果となった（藤原・田部2023）。

II 調査の経過

令和4年度の国史跡伊勢国府跡調査指導会議にて、令和5年度は令和4年度の第42次調査で検出されたSD382及びSD384の間にある東西街路の西延長線上と南北（中央）大路の交点付近である長塚南東区北西隅を調査すべきとの提言があった（Fig.3）。

ところが、当該調査候補地の土地所有者に賃貸借の契約交渉を行ったところ、現時点での契約は遠慮願いたいと申出があった。

そこで、第42次調査地と同筆内西部で、長塚北東区の想定中心軸を含む長塚南東区の北辺中央部に当たる箇所を代替候補地とし、土地所有者及び土地管理者に調査の是非について伺ったところ、了承が得られたため、今年度の調査対象地とした。

令和5年12月18日に第43次調査地の賃貸借契約を締結し、同日より調査に着手した。12月19日に表土除去を実施し調査を開始した。2月9日に調査指導会

議による指導助言を受けた。その後指導を受けた箇所の追加調査を行い、3月14日に埋め戻し調査を完了した。

以下、調査日誌を抄録して調査の経過に替える。

【調査日誌抄】

12月18日（月）曇 現地確認・機材搬入・座標設定
12月19日（火）曇 小型重機を導入して6AFE-C区及び6AFE-D区表土除去を行う。同時に遺構検出を開始。
12月21日（木）晴 遺構検出を引き続き実施、同日検出完了。検出状況写真撮影。
12月22日（金）晴 検出状況を平面図に描写。12月27日（水）まで平面図作成を継続。
令和6年1月9日（火）曇時々晴 溝の詳細を確認するためサブトレンチを設定し、掘削に着手する。
SD388、SD389、SD392の掘削が完了。
1月10日（水）曇 サブトレンチ掘削作業継続。
SD390掘削完了。SD391の掘削開始。1月12日（金）まで掘削作業を継続。
1月16日（火）曇り時々雪 サブトレンチを平面図に描写。途中降雪のため翌日に持ち越し。
1月17日（水）晴 平面図作成完了
1月22日（月）晴 サブトレンチ断面図作成
1月23日（火）曇 断面図作成継続
1月26日（金）雪のち曇 断面図作成継続
1月30日（火）曇 6AFE-E区を新たに設定し、表土掘削及びサブトレンチの掘削作業実施・完了
2月8日（木）晴 指導会議にむけ調査地の最終整備、調査区の写真撮影
2月9日（金）晴 指導会議開催
2月13日（火）晴 6AFE-E区の断面図作成完了
2月27日（火）晴 指導会議での指導内容を元にSD388並びにSD389を半截作業及び6AFE-D区のSD391部分の掘り下げを実施。SD390とSD391をつなぐようにSD394を検出
2月28日（水）曇 掘り下げを引き続き実施
3月4日（月）曇 掘り下げを引き続き実施
3月7日（木）曇 掘り下げを引き続き実施
SD391の掘り下げ完了。SD390部分に着手し完了。
SD395とSD390の交差部分にサブトレンチを設定、掘削作業を実施・完了。調査区の写真撮影
3月8日（金）晴 SD388並びにSD389の半截を平面図に加筆し、6AFE-D区の平面図を訂正
3月11日（月）晴 レベリング・各溝の芯の座標測定を行う
3月13日（水）晴 遺構保護用の山砂散布
3月14日（木）晴 重機にて埋戻し作業実施。現地調査終了

Tab.1 調査履歴

次数	調査年度	調査区記号	所在地	調査期間	面積 (㎡)	調査原因	概要
プレ1次	1957	A地点	広瀬町字南野			学術	礎石建物
		B地点	広瀬町字下				基礎
1次	1992	1号棟	広瀬町字長塚 1247, 1248	921110 ~ 930129	110	学術	礎石建物
		南野1	広瀬町字南野 971		115		礎石建物
		南野2	広瀬町字南野 981		110		瓦葺・溝
2次	1993	6AH-F, 6AJA-H ほか	広瀬町字神起 1226・矢下 1134 ほか	931129 ~ 940228	238	学術	政庁後院・東園棟・軒廊・東内溝・東外溝・西外溝
3次	1994	6AJA-J ほか	広瀬町字下 1131 ~ 1133	941006 ~ 941227	750	学術	政庁正殿・西園棟・西軒廊・西内溝・西外溝
3・2次	1994	帆調査区	広瀬町字中土居、龜山字能登野町字中土居	940601 ~ 940817	2,700	帆緊急	溝
4次	1995	6AJA-A ほか	広瀬町字下・南野・神起	950920 ~ 951219	254	学術	政庁後院・北外溝・西内溝・西園棟・東外溝・西外溝
4・2次	1995	帆調査区	広瀬町字中土居、龜山字能登野町字中土居	950605 ~ 950713	1,600	帆緊急	溝
5次	1996	6AH-F ほか	広瀬町字下 1154 ほか	960620 ~ 960716	133	市緊急	聖父住居・溝
6次	1996	6AH-F ほか	広瀬町字下 1154 ほか	960625 ~ 960719	288	市緊急	溝
7次	1996	6ACE-A	広瀬町字南野 972.972.1.972.2.973	961007 ~ 970121	580	学術	堀立柱建物・礎石建物・溝
8次	1997	6AFB-A	広瀬町字長塚 1279.2	971016 ~ 980210	632	学術	例地瓦・礎石建物・溝
9次	1997	A地区	広瀬町字下	980223 ~ 980320	21	市緊急	政庁南辺部
		B地区	広瀬町字下		26		政庁西園棟
		C地区	広瀬町字神起		5		溝
10次	1998	6AFB-B	広瀬町字長塚 1279.3.1279.5	980901 ~ 981228	1,014.2	学術	礎石建物・溝・土坑
11次	1999	6AJA-H ほか	広瀬町字下 1176 ほか	990901 ~ 000131	863	学術	溝・礎石建物・南門
12次	2000	6AHC-CE ほか	広瀬町字中土居・南野	001001 ~ 010311	1,142.8	学術	堀立柱建物・聖父住居・溝
13次	2001	6AHD-AB ほか	広瀬町字神起 1237, 1240.1 ~ 3.1241	010920 ~ 020214	714.2	学術	溝・土坑
14次	2001	6AEC-AB	広瀬町字中土居 1282.1	020106 ~ 020111	246	市緊急	礎石建物・溝
15次	2002	6AJD-H ほか	広瀬町字下 1154 ほか	020424 ~ 020812	1,184.1	学術	溝・土坑・古溝・土城基
16次	2002	6AHC-B ほか	広瀬町字下、西富田町字東起・矢野	020620 ~ 020925	3,463.4	市緊急	溝・堀立柱建物・土塀相基・古墳遺構・方形埴輪溝基
17次	2002	6ADH-A ~ E	広瀬町字西野 3300	020806 ~ 021130	4,640	市緊急	堀立柱建物・溝・聖父住居
18・1次	2003	6AC-F	広瀬町字下 1126	030417 ~ 030630	243	学術	溝
		6AD-E	広瀬町字下 1144	030421 ~ 030630	267		溝
		6ALE-A	西富田町字矢野 1015 ~ 17	030528 ~ 030630	21		なし
		6ALE-B	西富田町字矢野 1015 ~ 17	030528 ~ 030630	11		なし
		6ALC-C	西富田町字矢野 1015 ~ 15+16	030528 ~ 030630	48		なし
18・2次	2003	6AEA-A	広瀬町字中土居 1283.2	030902 ~	360		溝・土坑
19次	2004	6AAD-A	広瀬町字内 2609.1	040831 ~ 041118	220	学術	溝
		6AFA-A	広瀬町字中土居 1290.1	040913 ~ 041118	200		なし
		6ABB-A	広瀬町字長塚 1275	040928 ~ 041118	550		聖父住居
20次	2005	6AAD-B	広瀬町字内 2606.1 2607.1.2608.1	050822 ~ 051130	200	学術	溝
		6AGFA-A	広瀬町南野 945.6	051011 ~ 051130	140		溝
21次	2006	6ACB-A	広瀬町字西野 3242	060719 ~ 060908	500	学術	溝・土坑
22次	2007	6ADC-A	広瀬町字西野 3311	071001 ~ 071206	326	学術	風洞木・ビット
23次	2007	—	龜山町			龜山町緊急	溝
24次	2008	6AEB-C	広瀬町字中土居 1282.2	080616 ~ 080717	835	市緊急	溝・堀立柱多数
25次	2008	6ACA-A・B	広瀬町字西野 3243・3248 番	081001 ~ 081226	690	学術	溝・礎石遺構
26次	2008	6ADC-B	広瀬町字西野 3313 の一部	081218 ~ 081226	55	学術	溝・土坑・風洞木
27次	2009	6AFA-A	広瀬町字長塚 1244 番	090817 ~ 091216	580	学術	溝（道路側溝）・ビット・風洞木
28次	2010	6ABA-B	広瀬町中土居 1305 番 1	101101 ~ 110131	59	学術	なし（風洞木のみ）
29次	2011	6ABA-C	広瀬町中土居 1299 番 1	111201 ~ 130229	116	学術	なし
30次	2012	6AAE-A	広瀬町字内 2612 番 1	121201 ~ 130228	81	学術	なし
31次	2013	6AAC-D	広瀬町字内 2600 番 1	140122 ~ 140314	140	学術	ビット
32次	2013	6AFF-F	広瀬町字内 2626 番	140218 ~ 140328	63	学術	なし
33次	2014	6AIB-C	広瀬町字下 1038 番	150105 ~ 150304	61	学術	ビット
34次	2015	6AGH-C	広瀬町字南野 955 番 3	160201 ~ 160315	132	学術	溝・風洞木
		6AIF-E	広瀬町字下 985 番		81		溝・土坑・風洞木
35次	2016	6AIF-A	広瀬町字下 981 番	170113 ~ 170109	89.4	学術	溝
		6AIF-F	広瀬町字下 982 番		69.6		溝
36次	2017	6AHE-D	広瀬町字神起 1234 番	170901 ~ 171130	210	学術	溝・ビット
		6AIB-D	広瀬町字下 1039 番		149.5		溝（道路側溝）・ビット
		6ARB-C	中富田町字東起 1349 番		75		風洞木
37次	2018	6AIA-A	広瀬町字下	181213 ~ 190303	69.3	学術	溝・ビット
38次	2019	6ACG-C・D・E	西富田町字東起 1322・1323 1324 番	190712 ~ 190920	380	市緊急	聖父住居・土坑・ビット（縄文）土坑・溝
39次	2019	6AGD-G	広瀬町字南野 955 番 2	191205 ~ 200228	144.2	学術	溝・風洞木
40次	2020	6AFF-B	広瀬町字長塚 1248 番 1	200831 ~ 201109	399.04	学術	礎石建物・溝（築地）・溝・土坑・ビット・風洞木
		6AFC-A			11.69		礎石建物？・溝
		6AIA-F			171.15		溝（築地）・風洞木
41次	2021	6AFC-B・C・D	広瀬町字長塚 1252・1254 1255 番	211115 ~ 220214	136.97	学術	溝
42次	2022	6AFE-A・B	広瀬町字長塚 1259	230215 ~ 230328	154	学術	溝（築地・道路側溝）
43次	2023	6AFE-C・D・E	広瀬町字長塚 1259	231218 ~ 240317	223	学術	溝（道路側溝）
合計					29,088.07		

Ⅲ 発掘調査

1 調査の目的と方法

令和元年度の国史跡伊勢国府跡調査指導会議において、ここ十数年継続してきた北方官衙・方格街区の外周部の確認調査にある程度目処がついたことから、方格街区の史跡未指定範囲について区画施設と併せて内部の調査も実施して遺構の遺存状況を把握し、今後の追加指定につなげていくという方針が了承された。

このことに伴い、今年度の調査は令和4年度に引き続き長塚南東区を対象として実施することとした。

長塚南東区では、平成4年度に第1次調査として長塚1区、令和2年度に第40次調査として6AFF-B区・6AFG-A区の発掘調査が実施されている。長塚1区では「建物規模及び礎石建物、掘立柱建物の何れかも不明であるが」「幅60cmの東西の土手状遺構と、その内部（南側）に明らかに故意に埋め込んだ黄褐色土混入黒灰色粘質土層」を検出し、「土手状の遺構は建物基礎を形成する際の周堤」と考え建物SB02（第40次調査から「SB002」と呼称）とすると報告されている。また6AFF-B区（長塚1区に一部重複）ではSB002未検出箇所と、その北東に新たにSB370が確認されている。いずれも瓦葺礎石建物であることが分かった。

これらを含め、過去の調査はいずれもひとつの街区の西半にて実施されていることが指摘されていた。官衙遺構ということに加え、長塚南西区の南門の存在もあって、漠然と中心軸に対して左右対称な建物配置というイメージが抱かれてきたが、令和2・3年度に長塚南東区の東半にあたる6AFG-B～D区を調査した結果、単純に左右対称とならないことが確認された（藤原2021・前田2022）。令和4年度の第42次調査ではこの北側にあたる長塚南東区の北東隅から同北東区の南東隅の範囲を調査し、幅15mの東西街路を想定させる側溝を検出した。これは従来想定されていた方格街区のあり方を変えるものであり、西側にどのように延長されているか調査する価値のある結果であった（藤原・田部2023）。

また、伊勢国府跡の構造を理解するためには区画の一つずつ丁寧に調査する必要があると指導されたことから、本年度は前年度の調査で確認された東西街路の南北側溝の西延長線を確認することを目的とし、長塚南東区の北辺中央部及び同北東区の南辺中央部を調査した。

作業は、SD382とSD383の西延長線上にあたる6AFE-C区並びにSD384とSD386の西延長線上の6AFE-D区及び6AFE-E区の3箇所を調査区として設定し、小型重機を用いて表土耕作土を除去した後、人力で遺構検出を行った。

遺構は原則漸移層の深さでの検出のみにとどめ、溝の断面記録が必要な部分のみ幅0.5～1m前後のサブレンチ1～10を設定して掘削した。この状態で有識者の指導を仰ぎ、その指導内容に基づき追加調査を行った。

調査区及び検出した遺構は、令和4年度第42次調査時に設定した基準点K1、K3及びK4から日本測地系に基づく座標と水準高を振り込み、設定ピンを用いて平面実測した。写真は、35mmデジタル一眼レフカメラで撮影した。

2 調査の結果

(1) 基本層序

調査地の地目は畑となっているが、しばらく茶畑として利用されていた。南方・東方に向かってわずかに傾斜するものの、ほぼ平坦といつてよい地形である。

基本層序は、第1層：現在の耕作に伴う耕作土の黒色シルト層（黒ボク）、第2層：褐色シルト層（漸移層）、第3層：明黄褐色シルト（地山）となる。

(2) 各調査区の概要

ア. 6AFE-C区

令和4年度調査の6AFE-A区北部で確認されたSD382及びSD383が西にどのように延びているか確認するために、推定の延長線上地点に北部東西延長8m、南部東西延長10m、南北幅10mの調査区を設定した。

重機にて表土除去を行ったところ、遺構埋土が3箇所確認された。サブレンチを入れて最終的に確認できた遺構は、溝3条（SD388、SD389、SD392）である。

イ. 6AFE-D区

令和4年度調査の6AFE-A区南部で確認されたSD384及びSD386が西にどのように延びているか確認するために、推定の延長線上の地点に北部東西延長13m、南部東西延長16m、南北幅10mの調査区を設定した。

重機にて表土除去を行ったところ、遺構埋土が3箇所確認された。サブレンチを入れて最終的に確認できた遺構は、溝3条（SD390、SD391、SD393）である。

ウ. 6AFE-E区

6AFE-D区の調査で検出されたSD391がSD386と繋がっていないことが判明したため、調査範囲内でSD386の延長線上となる溝を確認するために、6AFE-D区東端から東に約10m離れた地点に東西幅1m、南北延長6mの調査区を設定した。

重機にて表土除去を行ったところ、遺構埋土が確認された。サブレンチを入れて最終的に確認できた遺構は、

溝1条 (SD393) である。

(3) 検出遺構

ア. 溝 SD388

6AFE-C区の北東隅で検出した溝である (Fig. 4)。幅は1.6mほどで、東壁沿いにサブトレンチ1を掘削した。西に2.8m延びたところで溝は途切れ、それより西では確認されなかった。

第42次調査で確認された溝SD383の延長線上の位置で確認されていることから、北方官衙「長塚北東」区画を構成する内溝に該当すると考えられる。

イ. 溝 SD389

6AFE-C区南東隅で検出した溝である。幅1.4mほどで、東壁沿いにSD392と連続する形でサブトレンチ2を掘削した。北部は溝の底面まで攪乱されており、溝本来の埋土は確認できなかった。西に2.6m延びたところで溝は途切れ、それより西では確認されなかった。

第42次調査で確認された溝SD383の延長線上の位置で確認されることから、「長塚南東」と「長塚北東」との区画の間に想定される東西路の北側溝だと考えられる。

ウ. 溝 SD392

SD389のすぐ北側で検出した東西方向の溝である。南北幅0.4mと細く、サブトレンチ2を掘削した。調査区東端から西に8m延びた地点で調査区の外へ続く。

また、位置関係上、第42次調査で確認された溝SD380の延長だと考えられる。ただしSD388及びSD389と比べ幅が小さく、これらとは年代や性質が異なるものと思われる。遺物の出土がないことから、年代等は不明であるが、SD380の延長と想定した場合古代まで遡るような溝ではないと思われる。

エ. 溝 SD390

6AFE-D区の北部で検出した東西方向の溝である。幅1.1mほどで調査区の東西両端に延びているため全長は不明だが、調査区内いっばいの13m弱を検出した。調査区の西壁沿いにサブトレンチ3、長塚南東区の想定中心軸付近にサブトレンチ4、調査区東壁沿いにサブトレンチ5を掘削した。南北の溝の肩は確認され、直線上に溝があったことが想定できるが、サブトレンチ3及び4の土層断面箇所においては攪乱土層により北側の肩がはっきりと確認できなかった。また、サブトレンチ5北側の肩はサブトレンチ3及び4の北側の立ち上がりの推定地点よりも北側に位置しており、溝の幅が2.5mほど

と大きくなっていることがわかった。この範囲のみ溝の幅が広がっている要因は正確に特定できないが、溝が崩れて広がったものと思われる。

第42次調査で確認された溝SD384の延長線上に位置する形で確認されることから、「長塚南東」と「長塚北東」との区画の間に想定される東西道路の南側溝だと考えられる。

オ. 溝 SD391

6AFE-D区南側で検出した東西方向の溝である。幅2.4m～2.9m前後とSD390と比較して幅広い溝となっている。調査区南東隅ではSD391の延長が確認できなかったことから、溝の状態の特定のために調査区の西壁沿いにサブトレンチ6、長塚南東区の想定中心軸付近に調査区南端までのサブトレンチ7を掘削した。サブトレンチ7の断面形状は、東側に比べると西側の肩が急であるものの溝が続いていることがわかる。そのため、サブトレンチ7の東壁から約4m東の地点に調査区南端までのサブトレンチ8を掘削した。北側の肩は確認されたが、南側で肩の立ち上がり確認できなかった。この結果から、サブトレンチ8付近でSD391が南へ曲がっている可能性を考え、調査区の南壁沿いにサブトレンチ7と8の南壁を東西に繋ぐ形でサブトレンチ9を掘削した。結果、幅1.6mほどの溝の立ち上がり確認された。

これにより、溝SD391は調査区途中で南に曲がっていることが確認され、SD386が6AFE-D区以東で途切れていると推測される。

カ. 溝 SD393

6AFE-E区南側でサブトレンチ10を掘削し検出した東西方向の溝である。幅4mほどで、SD386の幅とほぼ一致することから、この溝がSD386だと推定される。

SD393を6AFE-D区に向けて延長したところ、当該調査区南東端にある南北に延びた遺構埋土とおおよそ重なることから、ここでSD393が南北へ曲がることが確認された。

(4) 出土遺物

出土遺物はコンテナケース (55 × 33 × 10cm) に5箱分が出土した。大部分はSD391のサブトレンチ6、7、8、及びSD393のサブトレンチ10掘削時の出土であった。出土した遺物は瓦のみで現在整理中であるが、ほぼ平瓦と丸瓦で占められ、軒瓦は確認できていない。これらの中に、「宿」と押印された瓦が1点確認された。

また、サブトレンチ8内では1辺30cmほどの状態の良い瓦が出土した。

IV まとめ

令和2年度以降は長塚南東区において国府の構造理解のための調査を続け、今回の第43次調査は第42次調査で想定された東西街路が長塚北東区及び長塚南東区の中央部においてどのように延長されているかを調査の対象とした。

その結果、6AFE-C区においてほぼ想定された位置で溝SD388区画内溝とSD389の同外溝が検出できた。これら2つの溝は長塚北東区の想定中心軸から東に約6mの地点で途切れており、何かしらの出入口があったと想定される。平成13年度の第13次調査でも似た事例が確認されているが、今回の調査では西側の溝の途切れが確認されず、第13次調査同様に門があったと想定するには現時点で根拠が不十分であるといえる。今回の調査区の西側に調査区を設定し、想定中心軸の西側6mの地点で溝の途切れが確認できるなら、門があった可能性がより高くなるため、今後の調査に期待したい。

また、6AFE-D区及び6AFE-E区においてもほぼ想定された位置で溝SD390区画外溝とSD391及びSD393の同内溝を確認することができた。SD390は調査区全体を東西に延びており、第42次調査で検出された区画外溝がこの調査区まで延長していると推測される。一方で区画内溝SD391及びSD393はともに南へ曲がっていることが想定されるため、ここに2つの区画があったと推測される。これらの溝の埋土からは瓦が他の溝と比べて多く出土しており、瓦葺きの建物があったと考えられる。一方、この想定だと2つの区画が長塚北東区想定中心軸から東に4～5mずれていることになるが、これについての明確な原因を特定することができなかった。長塚南東区の中央部を調査することにより、原因究明に繋がる可能性があることから、今後の調査の結果を待ちたいところである。

発掘調査をはじめてから30年経った現在でも、未解明な点がまだまだ多いことがわかる。一足飛びでは不可能であるので、今後も一つずつ発掘調査を進め、丁寧に伊勢国府の構造を理解していく必要がある。

【伊勢国府関連参考文献】

- 浅尾悟 1993『伊勢国分寺跡（5次）長者屋敷遺跡（1次）』鈴鹿市教育委員会
- 石田浩司・杉立正徳・林和範 2001『盤整盤促進事業（担い手育成型）国府南部地区に伴う埋蔵文化財発掘調査 天王山西遺跡 三宅神社遺跡 梅田遺跡』鈴鹿市教育委員会
- 宇河雅之 1996『長者屋敷遺跡』『長者屋敷遺跡・峯城跡・中富田西浦遺跡』三重県埋蔵文化財センター
- 宇河雅之 1997『伊勢国府の方格地割』『研究紀要』第6号 三重県埋蔵文化財センター
- 小倉整 2006『伊勢国府跡 8』鈴鹿市考古博物館
- 杉立正徳 1997『長者屋敷遺跡（第5次）発掘調査報告』『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』鈴鹿市教育委員会
- 杉立正徳 1997『長者屋敷遺跡（第6次）発掘調査報告』『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅳ』鈴鹿市教育委員会
- 鈴鹿市考古博物館 2002『伊勢国府跡史跡指定ミニシンポジウム 近畿・東海の国府 発表要旨集』鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2007『富士遺跡（第2次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第9号 鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2007『伊勢国府跡 9』鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2009『伊勢国府跡 11』鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2010『伊勢国府跡 12』鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2011『伊勢国府跡 13』鈴鹿市考古博物館
- 田部剛士 2016『平田遺跡』鈴鹿市考古博物館
- 辻公剛 1996『国府政庁の規格性～近江国・伊勢国について～』『鈴鹿市埋蔵文化財年報』Ⅲ 鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 1997『三宅神社遺跡』『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 1994『伊勢国分寺・国府跡―長者屋敷遺跡ほか発掘調査事業報告』鈴鹿市教育委員会
- 新田剛ほか 1996『伊勢国分寺・国府跡 3』鈴鹿市教育委員会
- 新田剛ほか 1997『伊勢国分寺・国府跡 4』鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 1998『長者屋敷遺跡発掘調査概要（9次）』『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 1999『伊勢国府跡』鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 2000『伊勢国府跡 2』鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 2001『伊勢国府跡 3』鈴鹿市教育委員会
- 新田剛 2002『伊勢国府跡』『伊勢国府跡史跡指定記念ミニシンポジウム 近畿・東海の国府 発表要旨集』鈴鹿市考古博物館
- 新田剛 2004『付論・伊勢国府・国分寺系文字瓦』『企画展 文字瓦を考える』鈴鹿市考古博物館
- 新田剛 2004『伊勢国府とその周辺の重文軒丸瓦考 - 伊勢国府・鈴鹿間・鈴鹿駅家・河口間を考えるための覚書 -』『かにかく』三星出版
- 新田剛 2006『伊勢国府跡と大角遺跡における重文軒丸瓦』『考古学雑誌』90-3
- 新田剛 2011『伊勢国府の成立』『古代文化』第63巻第3号 財団法人古代学協会
- 新田剛 2011『伊勢国府・国分寺跡』同成社
- 新田剛 2012『伊勢国府跡 14』鈴鹿市考古博物館
- 新田剛 2013『伊勢国府跡 15』鈴鹿市考古博物館

- 新田剛 2014『伊勢国府と関連遺構』『駒澤考古』39
- 新田剛 2014『東海地方の重文系軒瓦』『古代瓦研究』6 大宮大寺寺・興福寺寺・鴻巣館式軒瓦の展開 奈良文化財研究所
- 新田剛 2015『東海道 伊勢』『古代の都市と桑里』桑里制・古代都市研究会 吉川弘文館
- 新田剛 2018『東海地方西部の本づくり・一枚づくり伊勢国府国分寺の所要瓦を中心として』『第18回シンポジウム 8世紀の瓦づくりⅧ―本づくり・一枚づくりの展開Ⅰ-発表要旨』奈良文化財研究所
- 新田剛 2020『伊勢国府 国府と方格地割』『季刊考古学』152 雄山閣
- 新田剛 2020『伊勢国府跡における平瓦一枚づくりの製作痕』『生産の考古学Ⅲ』駒澤大学考古学研究室
- 林和範 2006『平田遺跡（5次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第7号 鈴鹿市考古博物館
- 前田有希 2021『伊勢国府跡 24』鈴鹿市
- 藤岡謙二郎・西村睦男 1957『歴史地理的にみた鈴鹿市廣瀬台地の初期歴史時代遺跡群 - 軍陣跡の問題と附近の開発をめぐって -』『史迹と美術』第279号
- 藤原秀樹 1997『三宅神社遺跡（第2次）』『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報Ⅲ』鈴鹿市教育委員会
- 藤原秀樹ほか 1995『伊勢国分寺・国府跡 2』鈴鹿市教育委員会
- 藤原秀樹 2014『伊勢国府跡 16』鈴鹿市考古博物館
- 藤原秀樹 2015『伊勢国府跡 17』鈴鹿市考古博物館
- 藤原秀樹 2016『伊勢国府跡 18』鈴鹿市考古博物館
- 藤原秀樹 2017『伊勢国府跡 19』鈴鹿市
- 藤原秀樹 2018『伊勢国府跡 20』鈴鹿市
- 藤原秀樹 2019『伊勢国府跡 21』鈴鹿市
- 藤原秀樹 2020『伊勢国府跡 22』鈴鹿市
- 藤原秀樹 2021『伊勢国府跡 23』鈴鹿市
- 前田有紀 2022『伊勢国府跡 24』鈴鹿市
- 藤原秀樹・田部剛士 2023『伊勢国府跡 25』鈴鹿市
- 水野福松 1907『高津瀬村誌』
- 水橋公恵 2005『伊勢国府跡 6』鈴鹿市考古博物館
- 水橋公恵 2005『伊勢国府跡 7』鈴鹿市考古博物館
- 村山邦彦 1992『鈴鹿市・広瀬長者屋敷遺跡の研究』『古代学研究』128号 古代学研究会
- 吉田隆史 2009『富士遺跡（第3次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第11号 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2002『伊勢国府跡 4』鈴鹿市教育委員会
- 吉田真由美 2003『伊勢国府跡 5』鈴鹿市教育委員会
- 吉田真由美 2004『伊勢国府（17次）』『鈴鹿市考古博物館年報』第5号 鈴鹿市考古博物館
- 吉田真由美 2017『特別展 道でつながる古代の役所』鈴鹿市考古博物館

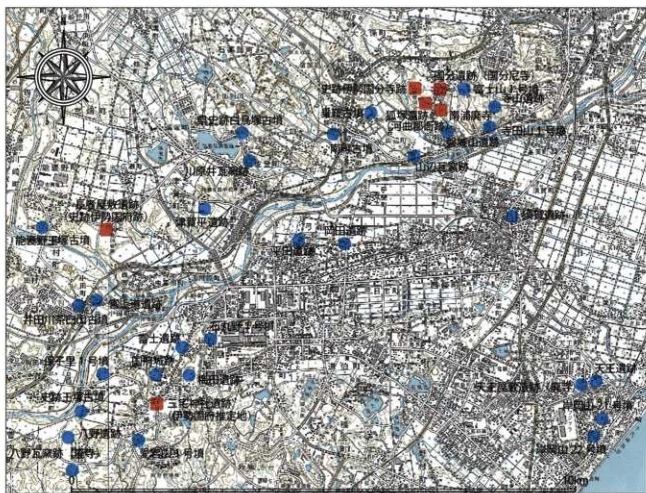


Fig.1 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:75,000)



Fig.2 伊勢国府跡周辺の主な官衙・寺院関連遺跡 (1:200,000)

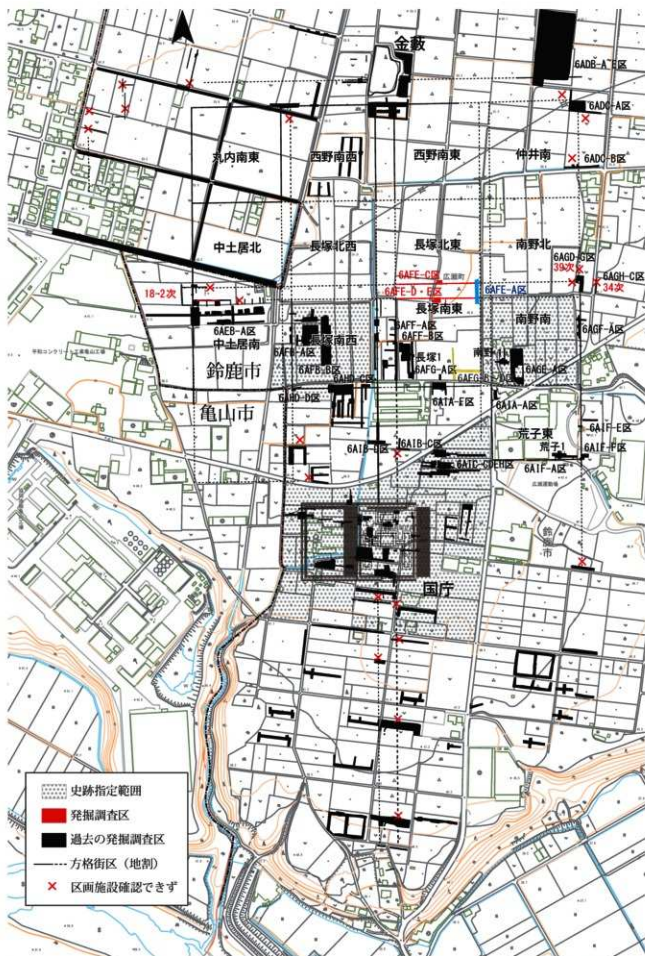


Fig.3 調査区位置図 (1:5,000)

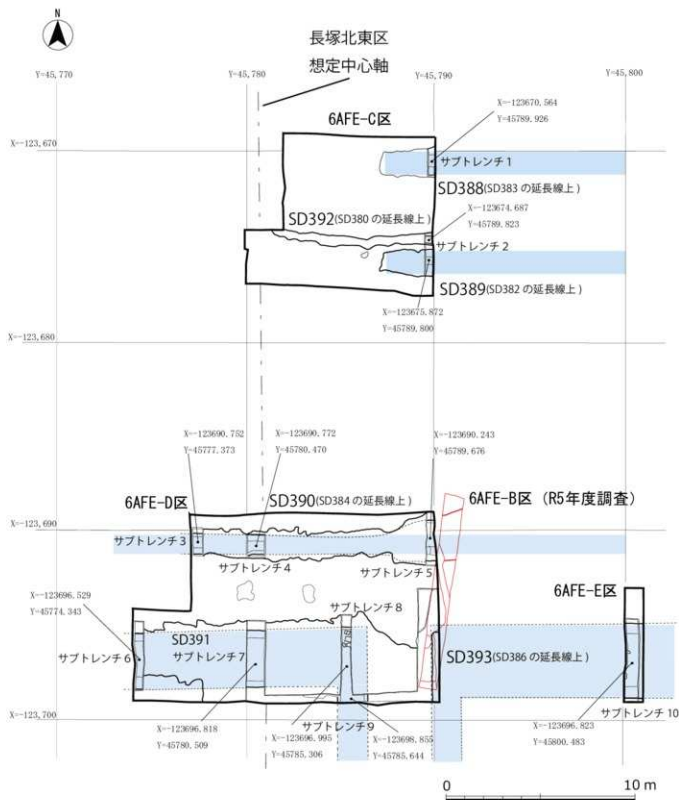


Fig.4 6AFE-C・D・E区 遺構配置図(Ⅱ層上面検出)(1:200)

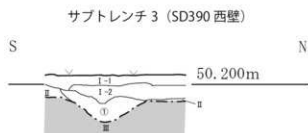
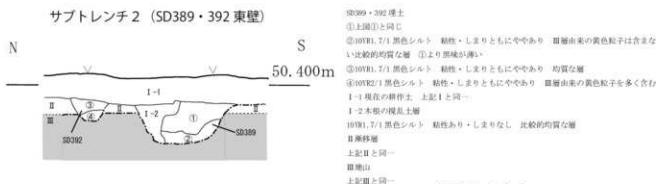
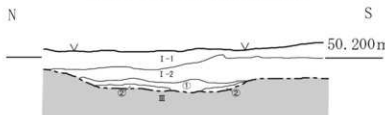


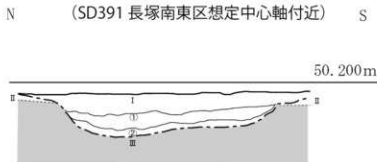
Fig.5 土層断面図① (1:50)

サブトレンチ 6 (SD391 西壁)



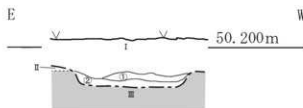
- SD391 埋土
 ①X1.7/1 黒ボク土 粘性あり・しまりややあり 均質な層
 ②2.0/2/1 黒色シルト 粘性あり・しまりややあり 層層由來の黄色粒子がブロック状に混在する
 I-1 現在の耕作土
 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性ややあり・しまりあまりなし 均質な層
 I-2 現在の耕作土
 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり・しまりなし 比較的均質な層
 Ⅱ南縁層
 Ⅲ地山
 10YR6/8 明黄褐色砂礫混シルト 粘性ややあり・しまりあり 5cm～10cm 大の礫含む
 ※Ⅱ層は存在しない

サブトレンチ 7 (SD391 長塚南東区想定中心軸付近)



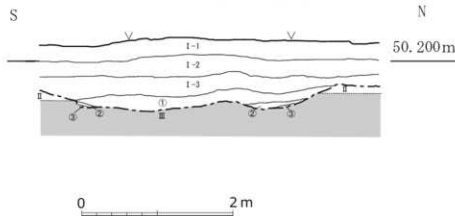
- SD391 埋土
 ①上記①と同じ
 ②上記①と同じ
 I 現在の耕作土
 上記Iと同じ
 Ⅱ南縁層
 2.5YR4/2 暗灰黄褐色砂礫混シルト 粘性ややあり・しまりあまりなし 均質な層
 Ⅲ地山
 上記Ⅲと同じ

サブトレンチ 9 (SD391 南壁)



- SD391 埋土
 ①X1.7/1 黒ボク土 粘性あり・しまりややあり 均質な層
 ②2.0/2/1 黒色シルト 粘性あり・しまりややあり 層層由來の黄色粒子がブロック状に混在する
 I-1 現在の耕作土
 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性ややあり・しまりあまりなし 均質な層
 Ⅱ南縁層
 上記Ⅱと同じ
 Ⅲ地山
 上記Ⅲと同じ

サブトレンチ 10 (SD393 西壁)



- SD391 埋土
 ①X1.7/1 黒ボク土 粘性あり・しまりややあり 均質な層
 ②2.0/2/1 黒色シルト 粘性あり・しまりややあり 層層由來の黄色粒子がブロック状に混在する
 ③X1.5/0 黒色シルト 粘性あり・しまりややあり 層層由來の黄色粒子を含まない均質な層
 I-1 現在の耕作土
 10YR3/1 黒褐色シルト 粘性ややあり・しまりあまりなし 均質な層
 I-2 現在の耕作土
 10YR2/1 黒色シルト 粘性ややあり・しまりなし 層層由來の黄色粒子が塊状に混在する
 I-3 現在の耕作土
 10YR1.7/1 黒色シルト 粘性ややあり・しまりあまりなし 層層由來の黄色粒子を含む ①と似た土色の層
 Ⅱ南縁層
 上記Ⅱと同じ
 Ⅲ地山
 上記Ⅲと同じ

Fig.6 土層断面図② (1:50)

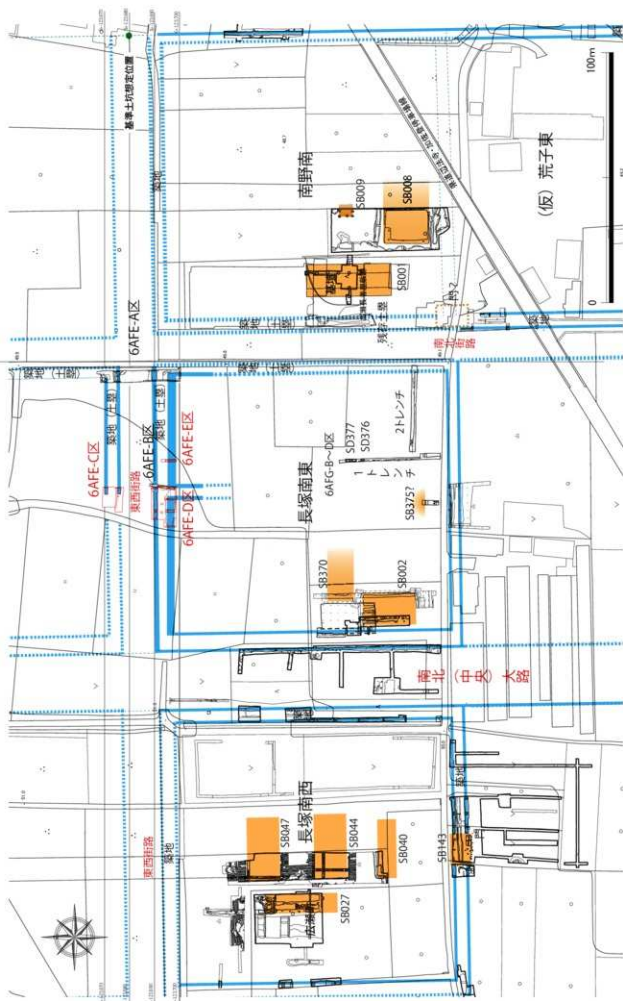


Fig.7 北方官街 長塚南東区周辺で確認された遺構 (1:1500)

Plate 1



調査前風景（南東から）



6AFE-C 区検出状況（上空から）



6AFE-D 区検出状況（上空から）



SD388・SD389・SD392 検出状況（南東から）



SD390 検出状況（西から）



SD391 検出状況（西から）

Plate 4



SD388 東壁土層断面（西から）



SD389 東壁土層断面（西から）



SD392 東壁土層断面（西から）



SD390 西壁土層断面（東から）



SD390 東壁土層断面（西から）



SD391 西壁土層断面（東から）



SD391 南壁土層断面（北から）



SD393 西壁土層断面（東から）



サブトレンチ8の瓦出土状況



押印瓦「宿」

主な出土遺物

Tab.2

報 告 書 抄 録

ふりがな	いせこくふあと にじゅうろく							
書 名	伊勢国府跡 26							
副 書 名								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	勝田 遼五							
編集機関	鈴鹿市 文化スポーツ部 文化財課							
所 在 地	〒 513-0013 三重県鈴鹿市国分町 2 2 4 番地 鈴鹿市考古博物館内 TEL.059 (374) 1994							
発行年月日	2024 年 3 月 31 日							
所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	発掘期間	調査面積	発掘原因
伊勢国府跡 (長者屋敷遺跡) 第 43 次	鈴鹿市広瀬町 字長塚 1259	24207	363	34° 53' 14"	136° 29' 53"	2023 年 12 月 18 日 ～ 2024 年 3 月 17 日	223㎡	学術調査
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
	官衙	奈良・平安	溝 (道路)	平瓦・丸瓦 (文字押印瓦を含む)			長塚北東区南辺および 長塚南東区北辺の側溝 を検出。長塚北東区 の溝は途中で途切れて おり、出入口の可能性 が推測される。	

伊勢国府跡 26

発行日	令和6（2024）年3月31日
編集・発行	鈴鹿市 文化スポーツ部 文化財課 発掘調査グループ 〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町2-24番地 鈴鹿市考古博物館内 TEL 059（374）1994 FAX 059（374）0986 E-mail：bunkazai@city.suzuka.lg.jp
印刷	株式会社 三ツ星
